芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.58　58・3

発行人・挾間正年　　編集人・原尻　実

もくじ

ふるさとと文学―帆足敏郎 …… 1
特集―美しい大分―華道…… 2
特集―美しい大分―茶道 …… 3
県芸術祭20周年記念行事準備委員会発足 4
提言　広田肇一、高山辰雄先生受章 祝賀会…… 5
県内の文化施設・別府市民会館 …… 6
市町村文化活動の現状―佐伯文化振興会…… 7
大分県演劇のあゆみ（7）・文化ニュース …8

ふるさとと文学

大分県立図書館長
帆　足　敏　郎

文豪漱石、鴎外、独歩、蘆花をはじめ、川端康成、火野葦平など、近代文学の代表的作家で大分県を訪れた人は非常に多く、また、大分県が舞台となり背景となって書かれた作品も数多く生まれている。

各作者の丹誠こめた表現によって、その土地土地の風景や人間や特色が、深い魅力をもって芸術化されているばかりでなく、そこにはまた、明治から大正、昭和へと移り動いていった郷土の歴史的姿が生々と反映されている。それらの作品の中には、それが作者の処女作であり、出世作であり、あるいは代表作として注目を浴びたものも多く含まれている。どの作品をとりあげても、それが単に文学作品としてスケールが大きいとか、時代がえがかれているとかいうこととは別に、その自然描写や人間描写は身近なだけに興味をそそられる。

このような県内各地と深い関係をもつ作品を、読過散逸にまかせることなく、できるだけ収集保存し、広く紹介して、ひとりでも多くの人に味わってもらい、ふるさとを再発見し、愛情を注いでもらう必要がある。この種の紹介や研究の本としては、野田宇太郎氏の「九州文学散歩（上・中・下）」、小野茂樹氏の「大分県と文学」「別府と文学」など何冊かがあげられる。豊富な資料と多くの人々の協力によってまとめられた貴重なものである。それらに収められた作品は明治以後の近代文学の分野、その中でも比較的有名人による創作作品を中心に選集したものであるが、遠く方丈記、萬葉の昔から現在にかけての各方面の大分県関係の作品を網羅することになれば、それは数巻にも及ぶであろう。

大分の土鈴　脇坂秀樹（東光会）

大分県読書グループ連絡協議会は、昨年秋、第８回の「文学バス」２台を連ねて、豊前路を訪ねた。また、県下各地で読書会を開くグループが多くなった。本を読むことは人生を読むことである。人との出会い、風景との出会い、絵画や彫刻との出会い、そして本との出会い、そのいずれもがなんらかの意味で人間の考え方や生きる姿勢に影響を与えてくれる。

最近、各地域でむらおこしの運動や文化活動が活発となり、地域地域の風土や歴史の特性を生かした活力ある地域づくりの機運が定着してきた。一方、テレビや漫画本の普及とともに、文学ばなれの現象もみられるが、数多くの文学作品を通して、文化的視点から〝ふるさと〟を見直し、「質の高い大衆――クオリティ・マス」の理想をかかげ、地域文化の創造という問題に切りこむことも必要であろう。

特集 ―美しい大分― 生活芸術をとおして……

花の心は和の心
美しい町づくりの一役に……

<華道>　牧　喜久子

池坊華道会連合支部県連が発足したのは終戦後間もない頃の様に思います。昭和23年３月には別府北浜小学校に於いて全九州連合池坊いけ花展を開催しています。

戦後索漠とした大分地区に生け花どころでは無いと考えたのは異っていました。花によって人々の心が、又生活がうるおされたと言うことです。

現在県内には、中津支部、国東半島支部、宇佐支部、別府中央支部、別府支部、日田支部、大分支部、大分東支部、臼杵支部、佐伯支部と10支部があり、これを一括して華道会池坊県連合支部と言っています。

各地区に於いてそれぞれ活動をつづけているのです。年に１回は此の10支部が回り持ちで各地区に於いて県連合いけ花展を、開催地区の人々との交流を深めているのです。今年度は日田支部の当番となっています。

花と対話する。人と対話する。美しいことだと思います。生きている花は大きな花、小さな花によらず常に人の心に自分の心を、うったえようとしている表情です。姿です。華道人はこれをよみとり自然にさからわず、拒まず、受け入れられた結果、人の心を打つ作品が生まれると考えます。

教える人、教えを受ける人も同じことで、心と心の対話を常に考え美しい和の世界を求めて行かなければと思います。生け花は和合によって成り立っているものです。

一瓶の姿を教える和合のありかたは人生社会生活の上にも最も大切なことです。現在日本の生け花は大変な隆盛で多くの人が習っています。県内におきましても池坊以外13流派の諸流があり、年に１回、大分合同新聞社主催で諸流展をトキハデパートで開催しています。秋は市役所の主催で文化祭に出瓶いたします。これも市内諸流合同で行ないます。去る３月20日には池坊九州連合いけ花展を体育館、商工会館、トキハ、パルコ等の御協力をいただき盛大に開催させていただきました。

お家元45世池坊専永宗匠をお迎えいたしまして各県からの出瓶者、県内出瓶者合わせて 1,860 瓶を展示させていただき、トキハデパートにはお家元の作品並に九州各県支部長出瓶で大変な賑いでした。

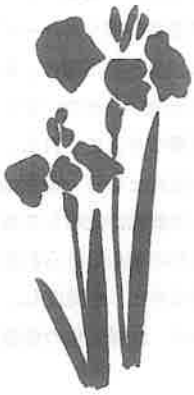
華道教授者は常に一般人との交流が多いものですから常に花の様に美しい心で、和の道を忘れることなく、明るい美しい大分の生活に、又町づくりにいそしみたいと念願するものです。

（池坊華道会大分県支部代表者）

足利義満が、この七夕花合わせに集められた花を一般の人々にも見せるようにとおふれを出し、人間の楽しむ花として多くの人々に広まって行った。花の立て方にも一段と工夫がつまれ、十五世紀中ごろ、〝たてはな〟、あるいは立花（りっか）の様式がととのい、花道としての成立をみた。

立花（りっか）

この立花は四季を通じて松を立てることが多かったが、だんだんと変化し、「心」を中心に左右、中右下、左後、右前、下前、下草などの形を示し、これが構成の基本的なものとなった。現在にみる「心」を中心にした副（そえ）・副請（そえうけ）など七つの名称を有する専門用語を生む母体となった。



特集 ―美しい大分― 生活芸術をとおして……

一碗のお茶を通して
人と人とのふれあいを！

<茶道> 首藤宗華

フランス料理を食べ、ロックを踊る若い人達、Gパンがすっかり衣生活に定着しようとも、やはり私達は日本人であることに違いなく、生活のはしばしまで日本的生活感覚からは抜けきらないのが現実でございます。

私が別府で茶道、華道をみなさまにお教えして早60年と少したちました。この度「生活芸術の立場から」と言うテーマで何か書くようにとご依頼がございましたが、さて何を書いてよいやら少々戸惑いを感じています。が、日本の伝統的な文化のうちで、最も生活に密着していると申しますより、生活の大切な柱をなしているのが茶道ではないかと思います。

茶の湯などと言えば、すぐ上流社会、いわばお金持さんのお遊びのように誤解されますが、それは間違いでございます。茶道の根本の心は、「和敬清寂」の4つに尽きると利久居士様は言われておられますように、和は、平和の和であり人の和、敬は長上に対する尊敬であり、同僚や目下の人に対する敬愛であり、清は、清く正しくかつ静に通じて、静寂であり、さらに心の平静さであり落着きでございます。寂は茶道の美の最高理念と教えられ、これを常に自分に言い聞かせつつ茶道の指導に当ってまいりました。「茶の美学」で谷川徹三先生は、茶道を芸術の一分野とみて、「身体の所作を媒体とした、演出の芸術」と規定されていますが、私はむずかしいことはよくわかりませんが、一碗のお茶を、どなたかとご一緒に楽しめばよいので、特別に意気ごんだり、身構えたりせずに、自然な気持でお茶をいただき、差し上げればよいのだと思います。

茶道は、私達のご先祖から受け継がれ、育み伝えられ日本人の生活の血肉となっている、日常生活の積み重ねでございますから、日本人であれば、誰でも何処でも一碗のお茶で心が通じ合うのではないでしょうか。

別府は緑が多く、海や山に恵まれておりますので、この風景をバックに、春風をほほにうけてのお茶は、又ひとしおよいもの、これが生活の芸術では……。

（茶道裏千家淡交会大分支部事務局長）

豆知識

利休と茶

千利休にはじまる茶道も封建的権力が確立する江戸期を迎え、大名茶といった将軍家を中心とした格式の高い流儀を生み出したが、利休はこのような支配者のもとにあっても草庵の茶としての民衆的な理想を長く茶道の土に伝えようとした。

流儀

流儀は大別して表千家・裏千家・武者小路千家の三千家があり、それぞれの流儀をもとに数多くの流派が生れた。各流派は多少の相違は見られるが、その精神性はいずれもみな、利休にさかのぼるといわれる。

点前

流儀による多少の違いはあるが濃（こい）茶・薄茶（うすちゃ）・炭手前（すみてまえ）があり、これらに習熟すると、習事（ならいごと）十三か条といった相伝がある。また表千家七代が定めた七事がある。

花の成道立

年中行事として生活の中に花がとりあげられたのは、〝七夕花合わせ〟からであるといわれる。金閣寺で有名な足利三代将軍、

県芸術祭20周年記念行事準備委員会発足

年々多彩な行事と充実した内容で発展してきた県の芸術祭も来年、59年で20周年を迎える。1つの大きな節目である。特に20周年は、54年度からはじめた「芸術文化基金」の募金6か年完了の年でもあり、豊の国大分県の県民文化の総開花の年といえる。この機会を記念して20周年記念行事を盛大に行なうための準備委員会が発足した。

県の芸術祭は、大分県、大分県教育委員会、大分県芸術文化振興会議、大分合同新聞社の四者の共催であるが57年6月29日の芸振総会で本年度の事業計画として20周年記念行事準備委員会発足を正式に決め、その第1回の具体的取り組みが、去る2月8日市町村会館で話し合われた。

準備委員会の構成は、芸術祭の主催者側として、挾間正年芸振会長・原尻実文化課長・狭間久合同新聞文化部長の3氏に、芸術祭運営協議会から山本勝彦音楽協会事務局長、その他芸振事務局から9人が加わり、13名のメンバーで構成されている。準備委員長に、挾間正年芸振会長、副委員長に菅久芸振事務局担当理事を決め、基本的な構想に入った。

まず行事としての基本構想は、20周年記念式典を開幕行事と同時（10月1日）に行ない、功労者の表彰をする。

開幕行事は3つぐらいの舞台部門を集中的に行ない、記念行事として盛りあげる。また20周年記念展として展示部門を期間中に行ない、閉幕行事として舞台部門から1部門……とし、開閉幕合わせて4部門のメイン行事はどこのジャンルにやってもらうかについては、かつて20年間で開閉幕行事を行なった実績のある団体12団体に参加の希望を聞いて、準備委員会で検討する。また記念展については、芸館・県美協と話し合いの上、記念展としてふさわしいものを企画する。その他、機関紙「芸振」で特集号を組む、講演会をもつ——等の基本構想を決定した。

続いて第2回の準備委員会を3月18日県庁で開き、まず開閉幕行事に参加希望のある団体代表者（県民演劇・県洋舞踊協会・県民オペラ・万謡会・県美協）に構想を聞いたあと、準備委員会で検討し次のように具体的な構想を決めた。

① 前回の基本線であった開幕3日間、3ジャンルの形式をあらため、参加希望があって、作品完成または企画のできる団体、5団体（県民オペラ・県洋舞踊協会・県民演劇・万謡会・県美協）にしぼり、20周年記念公演または記念展として芸術祭の期間中に（開閉幕もふくめ）いくつかのやまをつくる。

② 展示部門は、芸館が企画を考えているブリヂストン美術館展をできるだけこの期間中に開催できるように芸館と話し合いを進める。また県美展も記念展としてのテーマ等を設定して企画する。

③ 記念式典は、功労者の表彰と、文芸部門としての講演会等を催す。

④ 20周年記念事業として全体を通して大きいテーマを設定する。

——一応、開幕行事（10月1日）としてオペラ、10月中に洋舞、11月に演劇、閉幕として民謡。展示部門は10月にブリヂストン、11月に県美協とワク組みはしたが、各ジャンルの意向や芸館のスケジュールなどとも検討を要するので、具体的な設定は今後の話し合いによることになり流動的である。

記念式典と開幕をどう結びつけるか、講演会の日程をどこにとるか、文芸部門とどう結びつけるか、20周年記念テーマをどうするか……などを今後の検討事項とした。次回、第3回準備委員会を4月20日に開く予定であり、およその20周年記念行事の骨組みと方向性は決定した。

20年の厚みと実績

豊の国の文化の実り！

提言

小・中・高生徒に心豊かな鑑賞の機会を

県立芸術会館
学芸第1課長
広田　肇一

展覧会が終りに近づくといつも観覧者数が気にかかる。展覧会の事業の収支で考えると一般（おとな）の数の方が問題なのだが、私にとっては小・中学生、高校生の数の方が関心事である。「こどもたちは今、この展覧会が芸術会館で開かれていることを知っているのだろうか」「こんないい展覧会を見逃すこどもはかわいそうだな、もったいないな」など、ぐちともなんともいえない言葉が口をでる。

昨今よく耳にする校内暴力や非行の原因を情操教育の欠如ということに短絡的に結論づけることはできないにしても、何とかならないものかと考える。「教育とは、知・情・意のバランスのとれた人間を育てることである」などと大上段に構えるつもりはないが、情操教育の重要性は今さらいうまでもないことであろう。種々の文化活動を通して高められていく情操であるからこそ、鑑賞学習の果たす役割も非常に大きい。

すぐれた作品の前に立って心をひかれ共感をうることは、その作品のなかに自分自身を発見することであるという。したがって、みる人の個性、審美眼、感受性によって感じ方は十人十色である。そうした審美眼や感受性を育てるには、いいものを、しかもなるべく何度も見せることである。コピー技術の進歩とともにビデオ、スライド、複製画などの鑑賞教材は質的にも向上し、教室での指導も容易になったが、可能な限り本物を見せることが最も効果的である。

大分市の明野中学校は3年前から毎年2本の展覧会を鑑賞教材に選び、「私の好きな作品」などのテーマで課題をだし、休日を利用して全校生徒が鑑賞するよう指導している。遠隔地の学校では同じ方法はとれないにしても社会見学のコースなどに組みこんでほしいものである。

あたたかい人間関係は、心豊かな若い世代を育てることからなどと考えるこのごろである。

高山辰雄先生文化勲章受章記念祝賀会

昨秋の文化の日の表彰で栄えある文化勲章を受章した、大分出身の日本画家・高山辰雄先生の文化勲章受章記念祝賀会が、去る2月5日大分市の西鉄グランドホテルで開かれた。平松県知事が発起人を代表してあいさつ、続いて、佐藤大分市長、吉村商工会議所連合会会長、挾間芸術文化振興会議会長のお祝いのことばがあり、そのあと平松知事が記念品を贈った。

高山辰雄先生から「大分の絵かきを誇りに思い、今後も少しでも良い絵をつくって行くためにがんばりたい」とお礼のことばがあった。引き続き祝宴に移り、県下約160人の参加者の祝賀を受け、最後に、立木県立芸術会館館長の音頭で万歳を三唱し、会を閉じた。大分から4人目の文化勲章受章者として、県の芸術文化に栄誉ある足跡を残されたことは、県民としての大きな誇りである。

県内の文化施設

(6) 別府市 市民会館 中央公民館

別府市中央公民館（市民会館）は昭和３年別府市公会堂として完成しました。建築様式は近代ドイツ復興式に和風を加味したもので、館内には温泉の設備もありました。昭和25年から公民館として使用され、昭和42年から館内外の改造に着手し、昭和44年から大ホールを含む２階部分を市民会館として使用しています。

施設の概要は次のとおりです。

所在地

別府市上田の湯町６番37号

〒874　電話　22―4118

建物の構造

鉄筋コンクリート造り３階建

面　積

敷地　3,583㎡　　建物　3,101㎡

＜中央公民館＞

◦運営目的

市民のために実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行ない、市民の教養の向上、情操の純化をはかる。

◦事　業

・集会、行事の場の提供
・調査、広報活動の実施
・学級、講座、教室の開設
・文化祭、展示会、発表会の開設
・公民館運営審議会、社会教育委員の会議等の開催
・社会教育関係団体等の連絡調整

◦各室の状況

講座室　343㎡　　定員　120名
主に教室、講座の場として使用、貸館も可。

◦研修室　第１、第３研修室　40㎡　　定員　20名
第２研修室　88㎡　　定員　60名
第４研修室　25㎡　　定員　12名
第５研修室　36㎡　　定員　15名
主に社会教育関係団体の会議、研修室として使用、貸館も可。

◦その他　料理室　70㎡　　定員　36名
特別室　40㎡　　視聴覚ライブラリー　36㎡

＜市民会館＞

◦運営目的

市民のために集会、会議の場を提供し、各団体の発展を助長する。

◦各室の状況

大ホール　1,187㎡　　定員　760名
第１、第３会議室　40㎡　　定員　20名
第２会議室　88㎡　　定員　60名
第４会議室　50㎡　　定員　30名（和室）

◦利用時間

中央公民館、市民会館とも９時～22時

◦申込方法

電話、窓口にて予約受付して、使用前３日までに使用申請書を提出。

・附属施設に結婚式場（文化会館）もあります。

（館長　木野村季雄）

造花を咲かせる

「造花」を必要とする時代は不幸であり「造花」を必要としない時代はもっと不幸であるというパラドックスも用意しておかねばならないだろう。

そしてまた、「花を愛する人に悪い人はいない」という、まことしやかな箴言（しんげん）を額面どおり受取る勇気も必要なのかもしれない。

しかし、どう演劇的にとりつくろうと「花」でイメージするものは、私には不得手なのだ。

「造花」を咲かせてみたい。

毎日水をもらったり、薬をもらったり土の手入れなんかしてもらっている過保護な花だって、咲くというのに。造花が咲かないわけがない。

もしかしたら舞台の上で、「造花」を咲かせることを「演劇」と言うのじゃないかしら。

でもちょっとこじつけすぎですね。

（つか　こうへい　エッセイ集より）

市町村文化活動の現状～佐伯文化振興会～

郷土に高度な手作りの芸術文化を

佐伯文化振興会会長　片山覚自

佐伯文化振興会は、昭和46年末に佐伯文化会館が開館したのを記念して、文化会館が、市・郡内の文化団体に呼びかけ、賛同してくれた約40団体で結成された。以来事務局を佐伯文化会館が受け持ち、苦楽をともにして現在まで歩いて来た。

佐伯文化振興会の特徴は、邦楽・邦舞・民踊・民謡・詩吟・バレエ・合唱・人形劇の舞台部門。絵画・書道・写真の展示部門。短歌・川柳・郷土史の短文学。学術部門。茶道・生花の生活芸術部門と広範囲にわたるジャンルを包含している。そして各ジャンルから役員を選出し2カ月に一度の役員会を開き、横のつながりを強め、手作りの、質の高い芸術文化を創造するための話し合いがなされ、運営を進めている。

その成果は年に一度の秋1カ月間にわたって開催される芸術祭で発表され、市民の好評を得ている。

展示部門、短文学、学術部門は、それぞれ毎年新しいテーマをかかげて、市民へのアピールをし、舞台部門はメインテーマを決めて、相互協力による手作りの公演を重ねてきた。

その最も著しい例を紹介しよう。

文化振興会が発足して5年目、演芸会的なものから脱皮したい気運が起こり、会の手作りの創作劇を3年に一度はしたい。しかも、テーマは、郷土佐伯にこだわり続けて、ということになった。

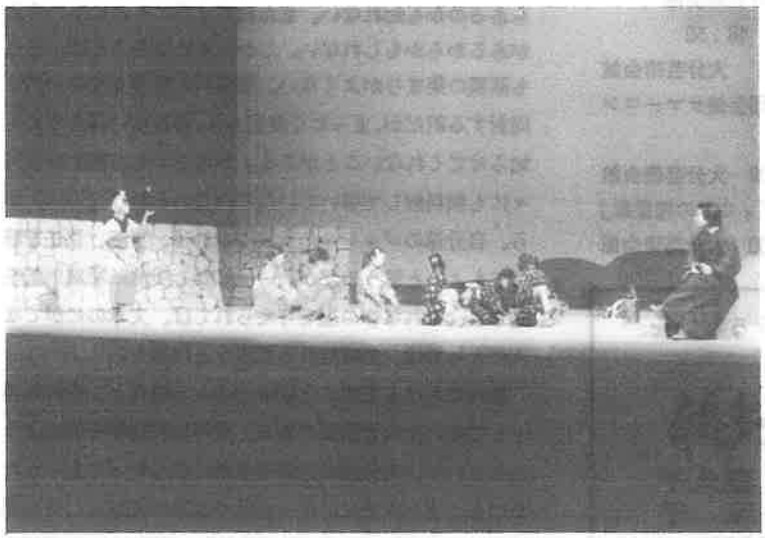
最初の取り組みは、昭和52年の「佐伯はるあき」だった。佐伯の年中行事に、民俗芸能、先哲の詩などをからませ、風物詩の舞台にした。すたれていた「臼坪杖踊り」の出演は、その復活をうながし成功だった。昭和53年は「豊後の国佐伯」国木田独歩が佐伯をえがいた作品で構成した。昭和56年の「佐伯ファンタジー」は、佐伯の童遊び、郷土史、民話でバラエティに富んだショーにした。

以上の全てに舞台部門は総出演、地方（ジカタ）も、作曲、演奏全て手作りの生演奏。展示部門は舞台美術、史談会は民話の語りを担当した。

会員は、この全て手作りのショーに取り組む意味と楽しさを理解してくれるようになった。今年もぜひ郷土の創作劇をしたい、と強い要望が出ている。総力を挙げてよいものを作りたい。

今後の課題として、会の全てを、独自の力でやっていくよう努力をしなければならない、と思っている。

（佐伯文化会館運営委員）



豊後の国佐伯「春の鳥」（昭和53年）

れんさい

大分県演劇のあゆみ（その7）

中沢　とおる

野呂祐吉（大分商業高校卒）が四十年代初め中央から帰ってきた。新制作座に在団し「野盗風の中を走る」で大分の舞台に立ったことがある。その後同劇団を去り、浅草の軽演劇界に暫く身をおいたあと、奥さん（多摩美大卒）の故郷栃木？で「劇団吉四六」を創設し、軽演劇スタイルの吉四六を舞台にのせ、県内公演をしていた。家庭の事情で大分市へ帰ってきた野呂は、実家（大分市高田）にかなり広い小劇場ふうの練習場をつくりそこを拠点に「劇団吉四六」の県内公演を始めた。数年間で県内小・中学校のすべてを訪問し、芝居づくりの楽しさを県下全域にひろめた業績は大きい。劇団員は全国から公募し、青森や新潟などからも集まった。自分の畠で野菜をつくり、自らの労働をとおした生活を土台に、地域のプロ劇団創設を試みた。これは全国初めての実験劇場づくりで、日本の演劇関係者の熱い視線を浴びた。私もこの時期の応援者の一人である。野呂は大分以外、鹿児島、福岡など他県の小・中学校もかなり訪問している。

劇団に困難な情況がうまれ、大野郡の野津市に拠点をかえ、現在も公演をつづけている。

野呂のあとに小袋丹が「小袋丹一座」を名のって別府で旗あげ公演をした。アングラ劇場運動が急速に台頭した時期、唐十郎の門を叩いた一人である。別府・大分市内の公園、神社の境内、レストランの一隅などでの公演は、一部の若者のファン層をつかみ、現在も公演活動をつづけているが、最近は芸術会館の舞台にたつことが多くなり、アングラ劇場の是非をめぐる動向が注目される。

野呂祐吉と小袋丹の動きは、地方におけるプロ劇団の創設という新しい冒険として、四十年代の地方演劇運動を象徴するできごとである。しかし野呂と小袋という個人のプロレベルと、劇団員のレベルとの落差は、正当なプロ劇団とはいい難い矛盾を露呈している。劇団KY（主宰・上東健次・高校教師）も、十号線（主宰・加藤幸福・高校教師）も同じ流れを指向する劇団であるが、その矛盾はいっそう深い（十号線は五十七年誕生）。

四十年代の地方演劇運動は、作品内容の質とレベルで一定の前進を進めたが、それだけに地方演劇運動の創造理念が改めて問われる時を迎えた。県民演劇は四十年代後半にうまれる。

（県民演劇制作委員長・芸振理事）

文化ニュース

□日本画の回顧と展望　5／27～6／19　大分芸術会館
□生誕100年記念　朝倉文夫展　9／10～10／10　大分芸術会館
□第19回県美展　10／18～11／6　大分芸術会館
□ピカソ陶芸展　11／12～12／18　大分芸術会館
□新劇・越後つついし親不知　7／1　18：30　大分芸術会館
□青少年のための音楽シリーズ　第6回芸館サマーコンサート　フィーデル弦楽四重奏団　7／31　14：00　大分芸術会館
□秋季文化庁移動芸術祭　オペラ「セヴィリアの理髪師」　9／24　18：30　大分芸術会館

お花をいけて暮しの中にうるおいを
華道家元
池坊大分県連合支部
連合支部長　牧　喜久子
連合副支部長　高須淳子
☎0975・(58)・7597

編集後記

年4回の発行で№51号から特集「美しい大分」ということで各ジャンル別に大分の風土や文化と、それぞれ自分たちのジャンルとのかかわりあいを書いてもらってきている。音楽・美術・文芸といったところまでは順調に原稿が集まった。組織的にもしっかりしており層の厚さもあるのかも知れない。また日常活動にそれなりの実績があるからかもしれない。しかしそれからあとは、どうも原稿の集まりがよくない。返信料と前号までの一例を同封する訳だが、まったく無視され、書けない理由さえも知らせてくれないことがある。かなりの知名度のある方々にも稿料無しで書いていただいているわけであるから、自分達のジャンルの代表であれば、当然、責任を感じてもよいと思うのだが。……しかし突然に原稿用紙を送られ、それなりの題を与えられては、文章のにがてな人にとっては、苦痛なことだろうとは思う。

県内における芸術文化団体の個々の成長と、交流の場として生れたのが芸振である。来年は20周年を迎えようとしている。自分達の分野を県民に広く知ってもらうためにも、また大分における活動や成果の記録としても機関紙に積極的に書いてほしいと思うのである。　（T）

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃